書評

『中世勅撰和歌集史の構想』

深津睦夫 著

安田徳子

一

深津睦夫氏の中世和歌研究の現在までの集大成ともいうべき著書が刊行された。氏が「あとがき」の中で自らおっしゃっている如く、「十三代集全般を対象とした史上はじめての研究書」である。「十三代集というのが従来まったく人気がなく、研究対象になることすらほとんどなかった」とも述べられている如く、「十三代集」という概念そのものさえ無意味との声もあるほどで、十三代集は個別には『新勅撰集』『玉葉集』『風雅集』の三集を除けば、ほとんど読まれもせず、研究もされてこなかった。しかし、なぜ「十三代集」と括るのか、明瞭な理由付けがなかろうが、長年に亘って認知されてきた概念である以上、和歌史上において、それなりの意味があったはずである。放置され雑草ばかりが広がる荒畑を耕し、耕地に蘇らせるように、「十三代集」各集に縦横から切り込んで、研究の「枠組」を示した本書の成果をまずは評価したい。

深津氏は私の大学院時代の一年後輩(断りをしておくが、雑念の多い私と違って、ひたすら研究の道をまっしぐらに進まれた氏は、私より数年お若い)、後藤重郎先生の元で、同じように中世和歌、それも十三代集に興味を持って、机並べて研究し、いくつかの共同作業も行ってきた。氏は研究の出発が『風雅集』、私は『玉葉集』だったこともあって、氏は南北朝、私は鎌倉中期と肩擦り合ってきた。鋭く勤勉な氏に教えられ、刺激を受けるばかりだったが、氏が身近に居られたからこそ、私も研究が続けてこられたと思う。私事ながら大いに感謝している。「十三代集」研究をしていると、「そんなつまらない作品を研究して何の意味があるのか」「そんな研究は

無駄だ」などの指摘をしばしば受ける。氏も「あとがき」で述べておられるが、自らの研究意義に「不安」を覚えてしまう。それを乗り越えて続けるには、強い意志が必要だったと思う。そして、後藤重郎先生の提唱された勅撰集研究の「横縦方式」「縦横方式」という研究方法も実践して成果を挙げられた氏に、不肖の同窓生としては感服するしかない。

二

さて、本書は大きく二編からなっている。第一編は「十三代集の史的把握」、所謂「横縦方式」、十三代集を横に貫いて読む視点からの研究、第二編は「勅撰集各論」、所謂「縦横方式」、一つの勅撰集を取り上げて縦に深く掘り下げた研究である。

第一編では、まず歌人構成について二十一代集を視野において分析、十三代集各勅撰集の特色と変遷を史的流れの中で捉えようとした。

第一章は、所収歌人数、多数入集歌人と少数入集歌人、歌人層(男・女・僧侶・神仏)別、当代歌人と古歌人(初出歌集別歌人)、そして武家歌人という基準で、数量的処理によって特色を読み取ろうとしている。確かに、十三代集が歌数という数量的問題を意識しているという背景はあると思うので、この方法がある程度有効であることは認められるが、一方で、数量的差異が何を意味しているのか、どれくらいの差異を有効なものと認めればよいのか、差異の意味の読み取りには問題が多いと思う。氏は例えば、時代が下るにつれて「一人当たりの入集歌数を抑えながら多くの歌人を入集させるといった傾向」とか、僧侶歌人数は続拾遺集以降増加し、女子歌人は後拾遺・玉葉・風雅の三集に多いことといった現象を指摘する。また、歌人の時代別の視点では、新古今歌人群はすでに認知されている如く認められるが、加えて「玉葉・続千載歌人」群の存在を提唱している。こういった氏のご指摘は大方の傾向として類推できることだが、これを数量として示されたことで明瞭に確認はできる。しかし、これらのことが勅撰集史においてどのような意味を持つのか、結章において多少は触れておられるが、もう一歩踏み込んだご意見が伺いたかった。

次に、応製百首、詞書の叙述ー助詞「き」と「けり」の書き分け、賀部の分析から十三代集の政治性について論じている。応製百首は氏もご指摘の如く、十三代集の撰集においては、撰歌の供給源として、撰集が計画される度に召されたものであり、十三代集を考える上では重要な問題である。また、詞書の「き」「けり」の問題も

撰集下命者と撰者、撰集の性格を示す指標として伝統的問題である。賀部が勅撰集の中で特別な意味を持つ部立であることは早くから指摘されてきたところであり、特に十三代集においては、勅撰集が撰集下命者の治天の君としての証的性格を持つ政治性の高いものであって、賀部はそれを強く反映した部立であるから、賀部の政治性を論じることも十三代集研究においては重要な問題である。こうした重要な問題を通史的に整理され、そこから各勅撰集の性格を読み取って論じておられるのは有意義である。特に、応製百首の分析は、勅撰集の範疇を越えて、歌題という視点からも中世和歌において『新古今集』が如何に大きな位置を持っていたかを指摘している点は興味深い。一方で、勅撰集編纂における「応製百首」という制度の問題も追及する必要を感じるがいかがであろうか。

さて、第二編の勅撰集各論では『続後拾遺和歌集』『風雅和歌集』『新千載和歌集』を取り上げている。この三集は第十六・十七・十八番目にあたる、南北朝の動乱期に撰ばれた勅撰集である。『風雅集』はともかく『続後拾遺集』『新千載集』両集はほとんど研究が進んでいないが、南北朝のそれぞれの進退に従って、歌壇も揺れ、勅撰集の撰集も翻弄された時期の集と言ってよい。こうした時期の撰集に目を向ける氏の興味は、動乱期、政争の狭間における和歌文学の有り様にあったと思う。動乱前夜の『続後拾遺集』では「表面上の鎌倉幕府尊重・持明院統との融和という後醍醐天皇の姿勢の裏に、反幕の意志が相変わらず存在していた」という有り様がそのまま反映しているとする。『風雅集』の序文には、撰集下命者で執筆者でもある花園院の宋学的思想によって支えられた和歌観が端的に表れていることを指摘する。「新千載集」は足利尊氏の執奏による勅撰集であって、尊氏の意志が強く働いていること、それは後醍醐天皇を讃頌することで、その御霊を鎮魂する歌集とすることだったと指摘する。本著は勅撰集史という範疇を対象としているので、勅撰集に数えられない南朝の撰集には敢えて触れられていないが、氏には南朝歌壇に関する興味深い論考が何編かある。そこで氏は南朝の准勅撰集『新葉集』の撰集意図に触れ、南朝の絶望的状況が生み出したものだと指摘している。勅撰集を撰ぶということが、南北朝の動乱期の和歌文学にとってどのようなことであったのか、文芸的営みを越えて、天皇の、為政者の、政治的精神的営みであったことを明らかにしておられるのである。

このご指摘は南北朝期の勅撰集のみならず、中世和歌の本質に通じるものであろう。

三

十三代集には心動かされない歌が延々と並んでいるという感が拭えない集も多く、ここを注視していくのは結構辛い作業である。しかし、十三代集は、文芸的営みとしての和歌活動がそれほどの高揚を見せていない時にも、政争の中で混乱し命が危ぶまれる時も、それを全く感じさせない形で次々と撰ばれ、読み継がれてきた。こうした有り様を分析することは、日本文学研究にとって、やはり必要不可欠な問題である。敢えて氏がこれに取り組まれ、その成果を公にされたことは、同じ中世和歌研究をするものには非常にありがたい。この学恩をいただきつつ、十三代集研究に私も改めて目を向けたいと思うが、氏がこの成果の上に、さらに中世和歌研究に飛躍されることを期待している。

〈二〇〇五年三月刊、笠間書院、一一〇〇〇円〉

（やすだ・のりこ／岐阜聖徳学園大学）